

巻頭言

## 趙樸初の墨跡

博物館長 礪波 護 (教授・東洋史学)

昨夏、編集に参画していた『中国の歴史』全12巻(講談社)の最終巻の第六章「日本にとって中国とは何か」を書きおえた。その際に私は江戸時代以前では日本と中国との仏教交流にかなりのスペースを割いたが、「親愛と嫌まないまぜの国」と題した昭和中期以後の節では日中仏教交流に全く触れなかった。

この時期については、額賀章友『日中仏教交流 戦後五十年史』(里文出版、2003年)が有益で、第一章「友好と平和を求めて(1952年-1966年)」、第二章「試練を越えて(1967年-1977年)」、第三章「友好交流、年々発展へ(1978年-1986年)」、第四章「黄金の絆をめざして(1987年-2002年)」からなる。特筆されたのは、1978年4月10日から三週間、中国仏教協会訪日友好代表団が来日して、関東と関西の各宗派を訪問した影響であった。団長は趙樸初(1907.11.21~2000.5.21)、塚本善隆が関西歓迎委員会の顧問、道端良秀が委員長で、私も委員のなかに加わった。

古稀のお年の趙樸初は、中国きっての能書家としても有名で、その墨跡は日本でも唐招提寺の開基鑑真の墓所の石刻や、横浜中華街と神戸南京街の門標にその片鱗が見られる。その趙が私の希望する文言を色紙に揮毫してくださいという有り難いお話。さっそく親鸞

『正信偈』の一句「大悲無倦常照我」をお願いした。『高僧和讃』の「大悲ものうきことなく、つねにわが身をてらすなり」にあたる。為書きの後に「属」の字を添えられたのは、礪波の懇囑に応じたの意味である。代表団の帰国後、日中友好仏教協会『日中仏教』第十号〈歓迎記念報告特集〉に私は「仏教的友誼」と題する一文を寄稿し、同号に掲載されていた趙揮毫の色紙を、お礼がわりに頂戴した。『阿弥陀経』の一節「諸上善人、俱會一處」である。もし趙樸初の墨跡展が企画されるなら、出品するのは整った墨跡の後者であろうが、愛着があるのは前者である。

中国仏教協会の機関誌『法音』が趙樸初の主唱で1981年1月に創刊され、すでに250号を超えた。目次に、仏滅に始まる紀年の仏暦も記載されている。仏暦2550年である西暦2006年の正月から春まで、東京国立博物館と上海博物館で〈名筆、時空を超えて一堂に〉と銘打った「書の至宝—日本と中国」展が開かれることになった。本学から、唐・欧陽詢が揮毫した楷書の神品、重要文化財「化度寺舍利塔銘」の宋拓が、東博展に出品される。貸し出しの当日、私は響流館で博物館長として立ち会い、東博の学芸員の方が慎重に梱包されるのを目の当たりにして感動した。



大悲無倦常照我。  
(大悲ものうきことなく、  
常に我を照らす)



諸上善人、俱會一處。  
(もろもろの上善人、  
ともに一処に会す)